



地域日本語支援ニュース こだま 第 251 号

2014.3.13



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

==== 目次 =====

1 ■ともに生きる■

日本人と共に地域で生きる

金昌鎮(キム チャンジン)

2 ■AJALT 公開講座より■

「漢字の姿は、心の姿」 講師 宇佐美志都氏

=====

1 ■ともに生きる■

日本人と共に地域で生きる

金 昌鎮(キム チャンジン)

AJALT 講師と国際結婚され来日 39 年になる金昌鎮さんに、さまざまなボランティア活動のなかでも、地域ぐるみで教育の場を作り、子育てを担われた、息の長い取り組みについて書いていただきました。-----☆☆☆☆☆☆☆☆

私が地域の一員として活動をするようになったのは、娘の小学校の P T A 副会長をしたのが始まりだった。来日 10 年後のことだった。その後、目黒区菅刈住区住民会議の副会長兼事務部長、目黒区青少年委員、目黒区都市計画審議委員、目黒区緑推進委員などボランティア活動をした。

私が住んでいる地域に菅刈公園という公園がある。以前、国鉄があった時代社員たちの宿舎があった場所で、国鉄が分割民営化する時、赤字減らしのため

に民間に売るという話があって、それを聞いた当時の目黒区青少年委員だった私を初め菅刈住区住民会議のメンバーは、その場所を地域の子供たちのための公園にしてほしいと、目黒区と東京都に対し運動を始めたが、受け入れてもらえなかった。その後、その場所の広さが規定面積より少し広がったために、国土利用法により民間に売ることが出来なくなり、基準公示価額で東京都に売ることになって、東京都はその土地を目的限定という名目で目黒区に払い下げをするようになり、公園の夢が実現出来るようになった。

菅刈住区住民会議のメンバーが中心になって公園設置準備委員会を作り、目黒区緑と公園課と協力しながら周辺住民達の説得、公園基本計画、公園完成後の管理体系などを話し合った。

来日 25 年後の平成 12 年に公園開設後、目黒区から公園の管理を委任された N P O の副委員長兼事務局長だった私は、その公園を利用した地域の青少年健全育成活動を始めた。公園の中に団栗池という小さい池を作って、そこから 50 メートル位の小川と約 2 坪位の水田を作って、小川にはめだかとトンボの幼虫を放し、春には田植えを、秋には稲狩りを子供たちとやる一方、秋には車で田舎に行ってイナゴを取ってきて公園に放し、子供たちとイナゴ取り大会などをした。また公園に畑を作って子供たちといろいろな野菜を作りながら、都心で成長する子供たちに自然を体験させた。秋には公園にある渋柿の実を取って子供たちと皮をむき、軒下にぶら下げ、干し柿づくりをした。これを見たお年寄りたちが、これがこの公園の風物だと喜ぶようになった。

公園づくりのときから、公園は遊ぶ場所でありながら教育の場にならなくてはいけないと考えていた。教育には家庭教育、学校教育、社会での教育がある。家庭教育はそれぞれの家庭で親が、学校教育は学校の先生がやるが、社会での教育は地域の人々がやらなければならないと思っている。私が小さい頃、韓国の村では老人かその村の子供たちが悪さをしたり、年寄りに挨拶をしなかったら、怒ったり注意したりしたが、この頃は子供がいくら悪さをしても挨拶をしなくても、注意する人が無いのが現実である。

これは韓国も日本も同じことである。そこで菅刈公園の中ではお年寄りには必ず挨拶をするように教えた。初めはなかなか言うことを聞かなかった子供もだんだん挨拶をするようになり、これも菅刈公園の風物になった。公園の管理の業務から離れて 6 年後の今、私が管理した頃の小学生は、高校生や大学生になった。先日は公園の前を通ったら知らない青年が挨拶をした。初めは誰かわ

からないが相手が挨拶をするので私も挨拶をした。その青年が、「金さん、私忘れまして？わたし000です。」という。その青年は、昔公園でなかなか挨拶をしないので私が怒った子だった。そんな子が成長して自分から挨拶をするのを見て非常に嬉しかった。

外国人日本人の関係ではなく、地域の子供たちの成長を支援する一員として生きていきたいと思っている。
